

トビウオ通信 (H29 第 2 号)

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

《平成 28 年 (2016 年) の島根県漁業の動向》

県の漁獲統計システムにより集計した県下漁業協同組合の漁獲統計資料 (属人) などから、平成 28 年 (1~12 月) の島根県漁業の動向を取りまとめました (海面漁業・漁船漁業のみ)。

全体 … 漁獲量・生産額ともに前年・平年並み

平成 28 年の島根県 (属人) の総漁獲量は 10 万 8 千トン (平年比 83%)、総生産額は 192 億円 (同 100%) でした (表 1、図 1、2)。前年 (平成 27 年) と比べると、総漁獲量で 1 万 2 千トンの減少、総生産額では 2 千万円の増加となりました。総漁獲量はサバ類が豊漁でしたがイワシ類が不漁だったため減少しましたが、総生産額は主にまき網で比較的単価の高いブリの漁獲が増え、またマアジの単価が増加したため微増しました。

漁業種類別で見ると、漁獲量ではまき網が全体の約 8 割を占め、漁業生産額ではまき網が全体の 41%、定置網が 10%、沖合底びき網 2 そう曳きが 12%、小型底びき網 1 種が 10% となりました。

魚種別で見ると、漁獲量の上位 5 魚種はサバ類 (2 万 8 千トン)、マアジ (2 万 4 千トン)、マイワシ (1 万 8 千トン)、ブリ (1 万 2 千トン)、ベニズワイガニ (4 千トン) となりました (図 3)。これらのうち、サバ類は漁獲量が平年を大きく上回り (平年比 163%)、ブリ (同 105%)、ベニズワイガニ (同 88%) は平年並みでした。マアジ (同 72%)、マイワシ (同 77%) は平年を下回り、特にカタクチイワシ (同 32%) およびウルメイワシ (同 26%) は大きく下回りました。

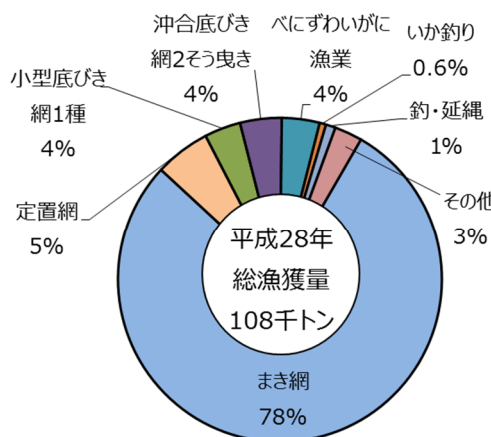


図 1 平成 28 年の島根県の総漁獲量の漁業種類別内訳

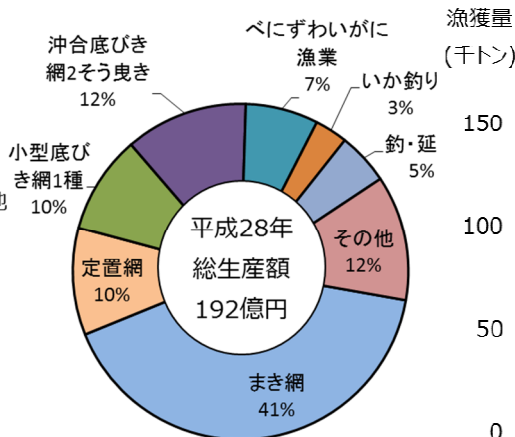


図 2 平成 28 年の島根県の総生産額の漁業種類別内訳

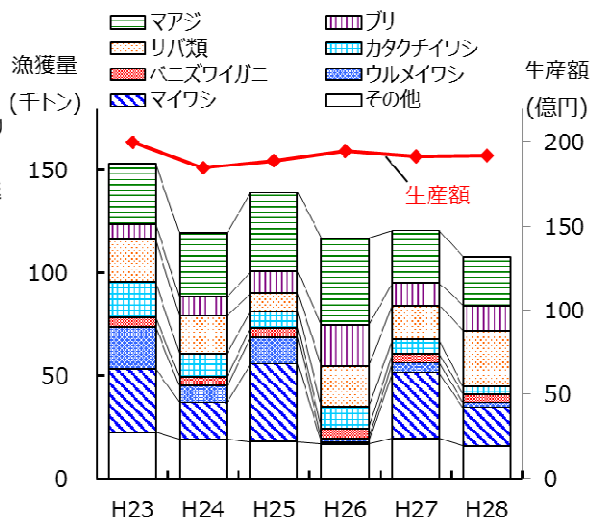


図 3 島根県の総漁獲量・金額の推移

＜文中の語句説明＞

- ☞ 平成 28 年の漁獲量・生産額および平年比は県下全地区、全経営体を対象に集計していますが、沖合底びき網の魚種別統計は実質的に県外を根拠にしている 1 経営体を除いた数値で比較しています。
- ☞ 「前年」は平成 27 年の数値、「平年」は過去 5 年 (平成 23 年~27 年)、沖合底びき網漁業のみ過去 10 年 (平成 18 年~27 年) の平均値を指します。
- ☞ 平年との比較は、平年比が 120% より高い場合は「平年を上回る」、平年比 80~120% は「平年並み」、平年比が 80% より低い場合は「平年を下回る」としています。

まき網漁業 ……中型まき網 1 船団あたりの漁獲量・生産額ともに平年並み

本県の基幹漁業の一つである「まき網漁業」には中型まき網や大中型まき網などがあります。これらは主にマアジ、サバ類、イワシ類などの浮魚（うきうお）を漁獲対象としています。

平成28年のまき網漁業全体の漁獲量は8万5千トン、生産額は78億8千万円でした。まき網漁業のうち大半を占める中型まき網の漁獲量は7万6千トン（平年比85%）、生産額は68億4千万円（同103%）でした（図4）。前年に比べ漁獲量は減少しましたが、漁獲金額はほぼ同じでした。1船団あたりの漁獲量・生産額は共に平年並みでした（漁獲量は平年比85%、生産額は同103%）。

中型まき網を対象に魚種別で見ると、マイワシは単発的に平年を上回る月があったものの漁獲量は1万7千トン（平年比80%）となりました。近年主力のマアジは4月に平年を上回る漁獲でしたが、他の月では平年並みか下回り、漁獲量は2万トン（同72%）でした。サバ類は、春秋漁共に豊漁で、漁獲量は2万2千トン（同179%）と平年を上回りました。カタクチイワシは3千トン（同34%）、ウルメイワシは2千トン（同29%）の漁獲量で、ともに平年を下回りました。

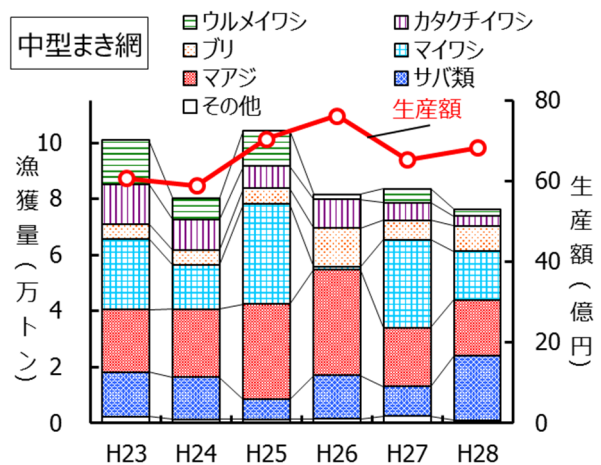


図4 中型まき網による魚種別漁獲量および生産額の推移

沖合底びき網漁業(2そう曳き) ……1 船団あたりの漁獲量・生産額ともに平年並み

沖合底びき網漁業（2そう曳き）は2隻の漁船で網を曳き、カレイ類、アンコウ、アカムツ（地方名ノドグロ）など海底付近に生息する魚介類を漁獲対象としています。平成28年の漁獲量は4千5百トン（平年比94%）、生産額は22億7千万円（同103%）でした（図5）。1船団あたりで見ると、漁獲量は641トン（同106%）、生産額は3億2千万円（同116%）でともに平年並みでした。1船団あたりの漁獲量・生産額の動向としては、平成24年に漁獲量・金額が減少しましたが、その後は増加傾向を示しています（図6）。

魚種別の動向では前年に引き続きマフグの漁獲量が多く、平年比は172%でした。また、キダイ（平年比130%）、アカムツ（同244%）、マアジ（同208%）、カワハギ類（同243%）も平年を上回りました。一方カレイ類は低調で、ムシガレイ（同57%）、ソウハチ（同77%）、アカガレイ（同56%）は平年を下回りました。また、アナゴ・ハモ類（67%）、アンコウ（同68%）も平年を下回りました。

沖合底びき網（2そう曳き）

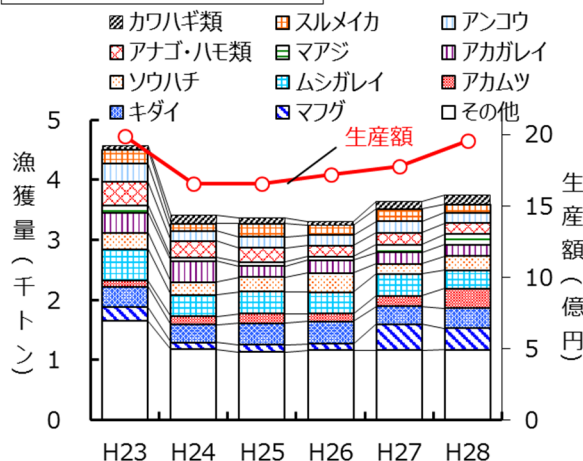


図5 沖合底びき網漁業（2そう曳き）による魚種別漁獲量および生産額の推移（一部経営体を除く）

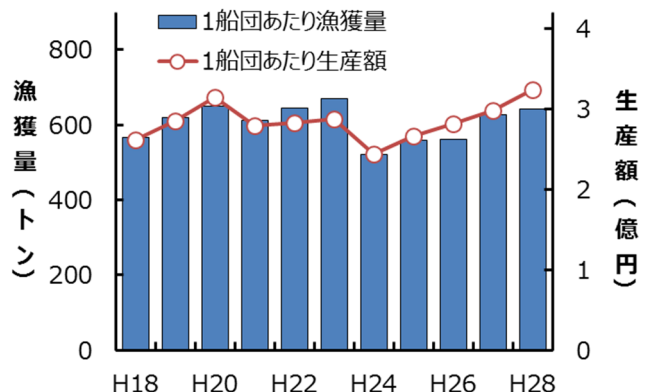


図6 沖合底びき網（2そう曳き）1船団あたりの漁獲量・生産額の推移

小型底びき網漁業 1種 …… 1隻あたりの漁獲量・生産額ともに平年並み

小型底びき網漁業1種は、1隻の漁船で「かけまわし」と呼ばれる漁法で操業し、カレイ類、ニギス、タイ類など海底付近に生息する魚介類を漁獲対象とします。平成28年の漁獲量は3千9百トン（平年比80%）で、生産額は18億2千万円（同96%）でした（図7）。本漁業の操業隻数は廃業や減船により平成22年以降で55隻から45隻まで減り、総漁獲量は減少しています。1隻あたりでみると漁獲量は90トン（平年比87%）、生産額は4千2百万円（同105%）でともに平年並みとなりました。

魚種別の動向では、アカガレイ（平年比127%）、ヤリイカ（同139%）は平年を上回り、ヒレグロ（同102%）、アンコウ（同90%）、アナゴ・ハモ類（同96%）、キダイ（同82%）、アカムツ（同96%）は平年並みでした。一方ソウハチ（同62%）、ニギス（同66%）、マダラ（同52%）、ムシガレイ（同75%）は平年を下回りました（図7）。

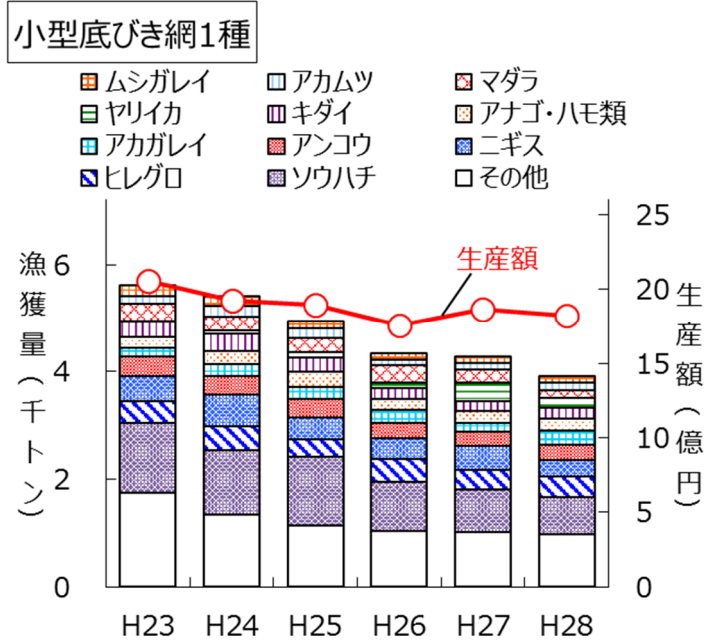


図7 小型底びき網漁業1種による魚種別漁獲量および生産額の推移

定置網漁業 …… 漁獲量・生産額ともに平年並み

定置網漁業（大型定置網・小型定置網・底建網）は魚類の通り道に網を張り、網に入り込んだものを漁獲する漁法で、マアジ、ブリ、サバ類、イカ類などが漁獲対象となります。平成28年の漁獲量は6千トン（平年比100%）、生産額は20億円（同97%）で、ともに平年並みでした（図8）。また、定置網漁業の全漁獲量の約8割を占める大型定置網の1ヶ統あたりの漁獲量（同100%）、生産額（同97%）についてもともに平年並みでした。

地区別の漁獲動向をみると、出雲地区ではサバ類（平年比438%）が平年を大きく上回りましたが、サワラ類（同93%）、マアジ（同91%）は平年並み、ブリ（同68%）、スルメイカ（同17%）が平年を下回り、総漁獲量は平年並み（同99%）となりました。

石見地区ではブリ（平年比50%）、コシナガ（同15%）が平年を下回りましたが、サバ類（同466%）、ヒラマサ（同168%）、ヤリイカ（同305%）が平年を上回り、マアジ（同90%）、サワラ類（同89%）は平年並みで、総漁獲量は平年並み（同118%）となりました。また、10月には例年のないタチウオの漁獲がありました（14トン、平年の234倍）。

隠岐地区では主力のスルメイカ（平年比9%）が平年を大きく下回りましたが、マアジ（同92%）、ブリ（同89%）は平年並みで、サバ類（同159%）、ヒラマサ（同178%）が平年を上回り、総漁獲量は平年並みでした（同82%）。

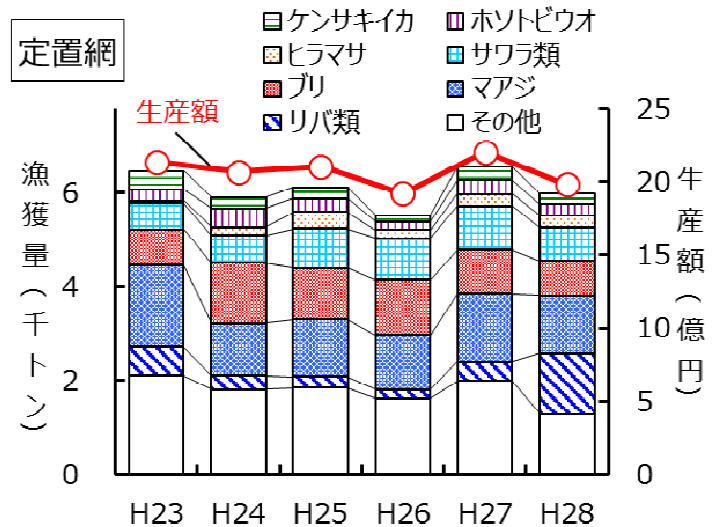


図8 定置網漁業による魚種別漁獲量および生産額の推移

釣り・延縄 …… 漁獲量・生産額ともに平年並み

釣り・延縄の平成28年の漁獲量・生産額はそれぞれ1千トン（平年比81%）、9億6千万円（同96%）でともに平年並みでした（図9）。長期傾向としては本漁業の漁獲量は経営体数の減少などにより減少傾向にあります。前年に比べると、平成28年は漁獲量（前年比93%）、生産額（前年比96%）ともに若干減少しています。

地区別の漁獲動向をみると、出雲地区ではサワラ類（平年比121%）、ハタ類（同125%）が平年を上回りましたが、漁獲量の約半分を占めるブリ（同77%）が平年を下回り、総漁獲量（同85%）は平年並みとなりました。マダイ（同104%）、アマダイ（同83%）は平年並みでした。

石見地区でもブリ（平年比48%）は平年を大きく下回り、サワラ類（同70%）やアマダイ（同74%）も平年を下回りました。一方、ヒラマサ（同158%）、ハタ類（同140%）、キダイ（同181%）、は平年を上回りましたが、総漁獲量（同70%）は平年を下回りました。クエは近年石見地区で漁獲が増えており、単価が高いことから平成28年の地区の魚種別生産額ではクエを含む「ハタ類」が首位となっています。

隠岐地区ではブリ（平年比176%）、ハタ類（同158%）は平年を上回りましたが、カサゴ・メバル類（同73%）、マダイ（同64%）キダイ（同63%）、クロマグロ（同77%）は平年を下回り、総漁獲量は平年並みでした（同92%）。

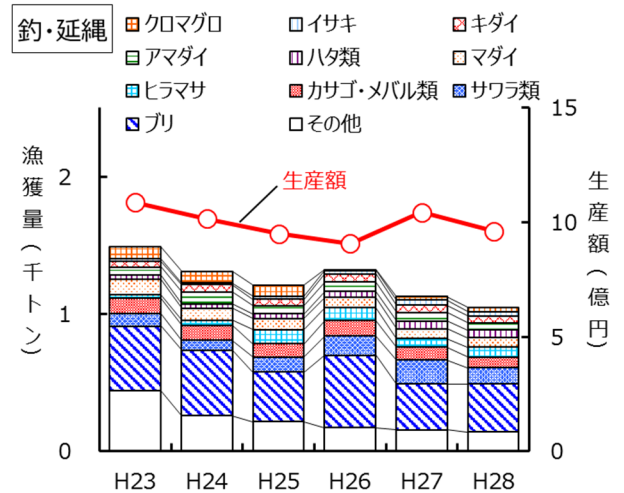


図9 釣り・延縄による魚種別漁獲量および生産額の推移

イカ釣り …… ケンサキイカ、スルメイカともに平年を下回る

イカ釣り漁業は名前の示すとおりスルメイカやケンサキイカなどのイカ類が漁獲対象で、本県では夜に集魚灯（漁火）によりイカを集める夜釣りが主流です。また、漁船の総トン数により「イカ釣り5トン未満」「小型イカ釣り（5トン以上30トン未満）」「中型イカ釣り（30トン以上185トン未満）」に区別されます。

平成28年の漁獲量は693トン（平年比60%）で平年を下回りましたが、生産額は6億円（同86%）で平年並みとなりました（図10）。魚種別で見ると、ケンサキイカは前年と同じく秋季来遊群が少なかったため、漁獲量は450トン（平年比62%）で平年を下回りました。スルメイカは1～2月に漁獲が少なく、その後も平年を下回る漁獲が続く、漁獲量は190トン（同51%）で平年を下回りました。ヤリイカの漁獲量は30トン

（同158%）と平年を上回り、ソデイカは前年漁獲がほとんどありませんでしたが、今年は21トン（同75%）の漁獲がありました。

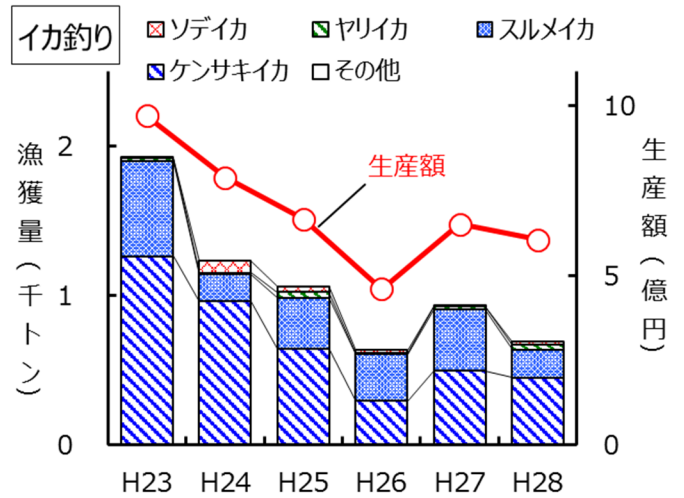


図10 イカ釣りによる魚種別漁獲量および生産額の推移

※ 各漁業の概要やトビウオ通信バックナンバーについては島根県水産技術センターのホームページをご覧ください。
（<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/>）

表1 平成 28 年の県内主要漁業の海区別漁獲量・生産額

漁業種類	海区	漁獲量※			生産金額※			1ヶ統あたり漁獲量※			1ヶ統あたり生産金額※		
		量(トン)	平年比	前年比	金額(百万円)	平年比	前年比	量(トン)	平年比	漁模様	金額(百万円)	平年比	漁模様
すべての漁船漁業	全県	108,168	83%	90%	19,189	100%	100%	—	—	—	—	—	—
中型まき網	石見	6,522	132%	111%	976	118%	138%	1,830	114%	○	259	103%	○
	隠岐	69,759	82%	90%	5,860	101%	101%	8,647	86%	○	721	106%	○
沖合底びき網2そう曳き	出雲・石見	4,492	94%	102%	2,266	103%	109%	642	106%	○	324	116%	○
小型底びき網1種	石見	3,731	82%	91%	1,726	100%	97%	89	85%	○	41	103%	○
定置網 ※※	出雲	3,695	99%	95%	1,380	97%	91%	229	100%	○	88	98%	○
	石見	1,102	118%	126%	286	103%	105%	244	139%	◎	62	120%	○
	隠岐	1,185	82%	66%	315	82%	78%	235	74%	▲	69	78%	▲
釣り・延縄	出雲	511	85%	90%	335	88%	89%	—	—	—	—	—	—
	石見	289	74%	83%	262	85%	87%	—	—	—	—	—	—
	隠岐	218	94%	118%	187	97%	107%	—	—	—	—	—	—
イカ釣り	出雲	306	57%	71%	298	87%	89%	—	—	—	—	—	—
	石見	177	73%	78%	176	97%	88%	—	—	—	—	—	—
	隠岐	211	56%	78%	131	71%	111%	—	—	—	—	—	—

※ 全体の漁獲量・生産額・平年比は県内全漁協・全経営体が対象。

平年比：過去5年(H23～H27年)の平均値との比較、沖合底びき網2そう曳きのみ過去10年(H18～27年) 漁模様：◎平年を上回る、○平年並み、▲平年を下回る

※※定置網の1ヶ統あたり漁獲量・生産金額は集計対象期間(H23～H28年)に操業実績のある大型定置網のみを対象に算出。